
るろ剣 × 銀魂 ~ 抜刀齋と白夜叉 ~

noa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

るる剣×銀魂〜抜刀斎と白夜叉〜

【Nコード】

N3221J

【作者名】

noa

【あらすじ】

繰り返される辻斬り

交差する剣心と銀時の過去

全てを知る謎の黒い少女

その先に待つのはHAPPY ENDかBAD ENDか

自分が守らなくてはいけないものは何なのか

支配するのは欲か

正義か

闇か

全ては何のためにあるのか

サア、オイデ

るる剣×銀魂

「人を斬って斬って斬りまくって、それで何が残ったー・・・？
ただ
の死体の山じゃねえか」

侍の国 この国がそう呼ばれていたのは遠い昔
宇宙外生物 天人の襲来によりこの国は変わってしまったのである
ー・・・いや、この国だけでなくこの星は・・・

そんな国にも変わらない魂を持った侍がいた

名は坂田銀時

3

彼は攘夷戦争に参加しており、腕も相当の者であった
・・・まあ普段はただのちゃらんぽらなだけでも

彼の何に惹かれるのか 彼の周りには多くの仲間がいた
彼を信頼し、一目置いていた

ある日の事である

銀時はいつものようにただダラーっとソファの上に寝そべっていた
仕事の依頼も来ないので暇だった

「あーっ腹減ったっ 新八、お前なんか甘いもん買ってこい」
「えーっ この前行ったばかりじゃないですか!」
少しイライラしたような声で新八は言い返した

彼・・・新八はメガネをかけたどこにでもいそうな少年だ
特殊なところといえば寺門通の親衛隊の隊長だというくらい
これといって目立つ点はない

「あ、それなら新ハイ私の酢昆布も買ってくるヨロシ 寄り道
すんじゃねーぞ」

「ええ、ちよつと神楽ちゃんまで?」

神楽は、宇宙最強戦闘民族「夜兔族」である
可愛らしい容姿をしているが、ものすごい怪力の持ち主でツッコ
ミも激しい
それに加えて毒舌

仕方がないあと新八は立ち上がり、少しフラフラしながら玄関ま
で行き、ガラッと障子を開けて出掛けていった

これから起こる出来事を知らずに・・・

るろ剣×銀魂（後書き）

ごちゃごちゃじゃねーかw

これから色々暴走させます
気をつけてww

辻斬り

「全く、あの2人は人使いが荒いよなあ　何で僕がパシリにされなきゃいけないんだろ」

頼まれた食料を買い終えた新八は、ぶつぶつと愚痴をこぼしながら帰り道をたどっていた

その時、新八の頭の中には昨日　神楽から言われた1言がぐるぐるとまわっていた

その言葉が再生される度に、新八はイライラしていた

「何も「能無しオタクメガネ」とまで言う事ないじゃないか・・・」

頭の中でその言葉がもう1度再生されようとしていた時、ちょうど川に差し掛かった

そこには人だかりができていた

「また辻斬りかい？」

「死体があがつたんだつてよ 気味が悪い」

「これで4人目じゃないか」

「あーあ、酷いことをするもんだ」

辻斬り・・・・・・・・・・・・？

そういえば、以前にもこんな事件があった

確か、前の事件は高杉晋助が率いる鬼兵隊の1人 以蔵による
犯行だった

人の魂を吸うといわれる妖刀 紅桜を操る以蔵は強敵だった

あの銀さんも深い傷を負った

しかし、その事件もすでに片付いたはずだ

とすると、別の人物による犯行か………

ドカツッ

考え事をしていた新八はいきなり背後から何者かに頭を蹴られた
慌てて振り返るとそこには新八をパシリにつかつた張本人 神楽
と銀時が立っていた

「痛いじゃないか 神楽ちゃん！ 後ろからいきなりけられない
だよー!!」

「こんな所で何、道草食ってんだ このメガネ！
だからお前は新一じゃなくて新八なんダヨ!!」

「おいおい、ちょっとそこのお2人さん、こんな所で騒がないで
もらえる？」

銀時がいつもと変わらない死んだ魚のような目で2人をなだめた

新八は言い争うのをやめた

神楽の方はまだ足りないようだったが、銀時の言葉を受け入れた

遠くではパトカーのサイレンが響いていた

それは 武装警察がくるというサインだった

辻斬り（後書き）

意味不明 w

次から出るよあのキャラが！

早くだしたい・・・w

容疑者

「はい、見物人はどいてどいて」

真選組局長 近藤勲がスピーカーを使って野次馬をどかし、犯行現場へと降りていった

近藤勲 真選組の彼らをまとめる実力・信頼はあるものの、本当のところはただのストーカー

新八の姉、お妙をストーキングしては、ボコボコにされている

外見はジャングルにいるゴリラそのもの

「ほう。これは派手にやってくれたもんだなあ」

「そーい問題じゃねーだろ 近藤さんよお」

タバコを片手で吸いながら土方は言った

土方十四郎は真選組 副局長

クールそうだがかなり短気で熱血なマヨラー

1回キレると止まらないので危険

「土方さん、めんどろだったんで、てきとーにそこら辺に居た奴連れてきました」

「総悟、てめえ何やらかしてんだ」

沖田総悟

爽やかな外見とは裏腹にものすごく腹黒い

そして誰もが認めるドS

「いや、こいつ刀持ってたんで いいじゃないですかア」

「それだけで連れてきたのか・・・で、そいつは何処だ？」

よく見ると、総悟の後ろに誰かが立っていた

皆、その容姿に驚いた

緋色に長く伸びた髪

整った顔立ち

それを崩すようについた左頬の十字の刀傷

青い瞳

腰に刀を差しているものの、身長も低い
ため、男なのか女なのか
分からない

「・・・えーと失礼ですが、性別は？」

近藤がためらいながらも聞いた

「？ 拙者は男でござるよ」

その答えに驚いた

銀時を除いて

あいつ、どこかで会ったような……

思い出せないが、どこかで聞いたような声だった

「……とりあえず……お前名は？」

「緋村剣心でござる」

やはり、どこかで聞いた覚えのある名前

「お前、最近こいらで辻斬りがはやっているのを知っているか？」

「人並み程度には」

「そうか、ならば話は早い 何か怪しい奴とか見てねえか」

言葉はちがうものの、土方の目は完全に「てめえが犯人じゃねえよな」といつていた

「さあ、そこまでは……」

土方の言いたいことは分かっていたが剣心は答えなかった

「土方さん、分かりました！」

「山崎か、それで、合ったのか？」

「いや、目撃情報では怪しい奴は背が高かったと言ってますし、その髪の色なら目立つんじゃないで　すか？」

「なるほどな」

山崎退　影の薄さを生かして監察の役割を持つ

バトミントン・カバディが趣味

「つーことだ、情報も手に入った訳だしさつさと帰るぞ」

「全く、流浪人とかいう奴が流れて来た言われたからどんな豪傑かと思いきや優男じゃねーか」

真選組が戻っていくのを暫くボーッと見ていたが、我に返り、新八は再び剣心の方を見た

ほかの人間とは違う何かを感じた

「あの・・・緋村さんでしたっけ、泊まるところがないなら万屋に来ませんか？」

「ダメアルヨ　新八！　そんなの銀ちゃんが・・・」

「いや、俺は別に構わねーけど？」

いつもなら、ものすごい反論をする銀さんが認めるなんてめずらしかった

剣心は不思議そうな目をしていたが、笑顔に戻った

「すまぬ、世話になるでござるよ」

容疑者（後書き）

真選組、めんどくさいんでとっとと解散「笑」

やっと剣ちゃんを書けるぞーーーー！「何だよちゃんって」

接点（前書き）

新八視点

番外編なのか続きなのか・・・；

接点

緋村さんが万屋に住むようになってから早1週間

僕は違和感を覚えた

1つは緋村さんのこと

洗濯・掃除・買いだし・ゴミだし……

料理も上手かった

いつもパシリのようにつかわれていた自分の負担もかなり軽くな
った

どんな事でも文句の1つ言わず取り組む緋村さんを見るとなんだ
かこっちの方が世話になっている気がする

性格もおだやかで、お人よし

僕の周りにはまともの人が少ない「いや、居ないかもしれない・
・」から彼には好感を持った

なのに、なんでそんな良い人がこんなご時勢に刀を差しているのかが分からない

過去に何かあったのだろうか？

だが、あの人の優しい笑顔を見ると、とてもそうには見えない

そういえば、僕は緋村さんの事をほとんど知らない

いや、知る気がない

聞いても彼の事だ

素直には答えてくれないだろう

過去に何かあったならなお更の事だ

もう1つは銀さんの事だ

銀さんは緋村さんを見る目がほかの人違っていている気がした

「いや、どこかで会った気がするんだ

覚えてねーけどな

あいつが作ったパフェもどつかで食べた気がしてな」

パフェの事なんか聞いた覚えはないが。

大体、最近は特に銀さんの記憶があやふやだ

いつものように、会ったこともない人を作りだして、影を合わせ
ているだけなのかもしれない

銀さんと緋村さんに接点があるかも分からない

まあ、その内に分かるだろう

そんなに知らなくてはいけないような事でもないし

そう、新八が思い込んだ時、ピンポンとチャイムが鳴った

接点（後書き）

オ・ワ・タ¥「ハ〇ハ」／

あ、なんで少し更新時間空けたかって？

いや、そう毎日更新してたらただのヒマ人だと思われるじゃん？
自分も色々忙しいし・・・

剣心「何か色々言っているが、ただ単にネタ切れだったただけでござるよ」

い・・・いいもん！

次は1番出したかったあのお方の登場予定だから！

銀時「こいつ、そのキャラのために次回の話だけ考えてるからな
いつも考えとけての」

来訪

ピンポン

「すみませーん、皆居るかしら？」

剣心以外には、声の主が分かっていた

銀時と新八の顔がうつすらと青ざめている

剣心は、2人の様子から来客がただ者ではないことを悟った

長い沈黙が続く

このまま出なかったらどんな目に合わされるか分からない

意を決したように新八は立ち上がり、ガラツと障子を開けた

予感的中。

そこに立っていたのは新八の姉、志村妙だった

手には、ふろしきで包んだ弁当箱のような物が握られている

「こんにちは。丁度手が空いていたし、こんな時間だから皆お腹が空いているだろうと思って卵焼き を作ってきたのよ」

時計を見るともう1時をまわっている

腹は減ってもお前の卵焼きだけは食いたくねえんだよおおおお
おお!!

お前が作ったのは卵焼きじゃなくて核兵器だろうがあああああ
あ!!!!!!

銀時の目は明らかに拒否している

「あら、見慣れない顔があるわね　どちら様？」

銀時の目に気付いていないのか妙はおだやかな口調だ

「姉御オ　コイツは剣心アル！　ちょっと前からここに住んでる

ヨ！」

空気と化していた神楽が明るい声で答えた

「緋村剣心でござる　お主が新八殿の姉上、妙殿でござるか

拙者、ここには世話になっている　よろしくたのむでござる
よ」

「あら、そうなんですかあ　こちらこそよろしくお願いします
家の新ちゃんが迷惑かけてないでしょうか？」

「いやいや、そんな事はないでござるよ」

あーもう、やだやだこの2人！

何でこんな時にそんな笑顔で会話できる訳!?

緋村さんも姉上もそう簡単に表情をくずしたりしませんよ 銀さん

銀時と新八は目で会話している

「あ、そうだった、良かったらこれ食べて下さい」

カパツと開けた箱の中には炭なのか何なのか分からない物がいくつも入っている

「・・・妙殿、これは・・・？」

「卵焼きですよ この人数では足りないと思いますけどどうぞ召し上がって下さい」

剣心がこの世の物とは思えない物に驚いている時、銀時はそろりソロリと後ずさりをしていた

「銀さんも、もちろん食べますよね？」

妙が銀時の方を向く

銀時はただ、誤魔化し笑いをするしかなかった

次の瞬間、妙の目つきがギロツ変わりどこから持ってきたのか鉈をふりかざし、銀時に襲い掛かった
周りのオーラも黒く変化している

こうなったら、手のつけようがない
部屋の中はもうメチャクチャだ

また掃除しなくちゃなあ・・・
新八は冷静だった

踏み倒された椅子・机・テーブル
散らばったジャンプ

立ちまくった大量のほこり
掃除しない訳にもいくまい

「逃げんじゃねえよ天然パーマアアアアアアア！」

「お前の卵焼きはもはや食べ物じゃねえよ！」

あれは1種の兵器だる兵器！！」

「何だとおおおおおおおおおお！！！！」

戦いは凄みを増すばかりである

「そこかああああああっ！！！！」

グサツツツ

妙の鉈に何かがささる音がした

銀時絶命か……………

と思いきや、鉈は2人を止めようとした剣心に直撃していた

意識を失い、剣心はその場にバタツと倒れた

「ひ、緋村さん!？」

妙の意識が元に戻った

「ええええええええ、ちよっ緋村アアアアアアアアアア!！」
思わず避けてしまった銀時はあせっていた

「銀ちゃん、剣心死んじやうアルか!？」

「銀さん、姉上どうするんですか!？」

あせっているのは銀時だけではなかったらしい

「と・・・とりあえず俺タイムマシン探してくるわ・・・」

「待てエエエエエ!！」

そんな新しい方向探すなアアア!！」

銀時の目は逝っていた

「とりあえず治療しなきゃ 皆頼んだわよ!！」

「は・・・ハイ!！」

妙の指示に従いながら懸命の治療が続いた

~~~~しばらくして~~~~

剣心の呼吸も大分整い、後は安静にしておけば良いと言って妙は  
帰っていった

「銀さん、もう大分経つんで緋村さんの冷えピタ代えてきて下さい」  
「えー、あいつ鈍がささったんだろ? 何で冷えピタが必要なんだ  
よ」

「それは作者の知識の問題です　誰のせいでこんな事になったと思ってるんですか？」

新八の一言にさすがの銀時もため息をつきながら読みかけのジャンプを置き剣心が眠っている部屋へと向かった

ギッ

何だ？

物音がしたぞ・・・・・・・・

銀時は障子を開けた

そこには剣心が立っていた

否、もう1人の剣心が立っていた

来訪（後書き）

あ、作者がかきたかったのは妙サンじゃないよ？「笑」

紛らわし編 下克上(前書き)

とりあえず、注意。

剣心が黒いような・・・ww

## 紛らわし編 下克上

一番槍 俺がいただき

ラスト侍 坂田銀時

木刀使用

変な捏造のせいで、ニコでの俺の扱い「受け」

ちよつと待て、コラア

俺は男だ！

舐めた真似すつと 食わずぞ銀時并  
ちよつ、イメージ違うんじゃない？

秘めたる力は実はかつてないほどの

美声 聴け キャラソン聴いて

ひでえ発言は無視して

ネタをくれ 他キャラに太刀打ちできる力を  
ネタをくれ！ そいつ武器に俺は立ち上がるぜ

そら、行くぞ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

そら、行くぞ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

一家総出で啖呵切った

もと天然だしまあいつか

拙者が皆にお詫びちゃんと

- バキューン- ってしないでござるよ？

こんな性格なら新八殿より、拙者の方がまともじゃねえ？  
でもまともなだけじゃ何も変わらないから

此処はあえて 抜 刀 斎

〔銀〕 いいか、聴きな あいつのKは

無論、おk 鬼畜のKだ

時代背負うこの熱い胸には凡人〔ヒト〕には無い感性が宿る

侍一家の御旗のもと 集う絵師達が振りかざす炎

一騎当千の虎を筆頭に臨機応変に掴み取る勝利

ネタをくれる作者達には幸運の呪文を

二人描く絵師達には笑顔を捧げるぜ

ファンよGJ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

ネタよGJ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

作者GJ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

本誌GJ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

そら、行くぞ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

そら、行くぞ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

そら、行くぞ！ 下克上！

此処に集え我ら 侍一家

そら、行くぞ！ 下克上！

此処に集え我ら集え我ら集え我ら侍一家

銀「ふーっ終わった・・・」

新「ふーっじゃないですよ 何ですか上のは！」

銀「んあ？「下克上」の替え歌「銀時・剣心バージョン」だ」

新「何でそれを此処に書くんですか全然前の話と繋がってないですよ！」

剣「作者がスランプになったから」

新「あれは何時でもスランプでしょ！ てゆーか僕は名前だけですか！」

神「私に関しては名前さえもでてきてないネ！」

銀「まあ、スランプだし？ 仕方ないじゃん」

神・新「スランプでまとめるな！」

新「大体、銀さんも緋村さんも主人公なんですしこんなの必要ないんじゃないですか」

下克上って下から上に這い上がっていくやつでしょう？」

剣「そうでござるな、確かに拙者はずっと人気投票で一位だったから必要ないが銀時は必要でござる う？ まじめに主人公やってなかったせいで人気投票一位ではなかったことがあったし・・・

主人公が一位になるのが「普通」なのに前代未聞でござるよ

なあ、銀時・・・？」↑黒い微笑み

新「ちよっ、緋村さんそれは・・・！」

神「銀ちゃん、完全にふさぎこんだアル」

銀「・・・」↑放心状態

新「まさか緋村さんが毒舌キャラだったとは・・・  
て、あれ？オチは？」

A「ありません「スランプですから・・・w」

紛らわし編 下克上（後書き）

補足

受け 友達からのリクエスト

バキューン ご想像のお任せします

まともじゃねえ？ 剣心の心の中の口調

抜刀斎 ネタばれ「笑」

K 剣心のイニシアル

鬼畜 自分は剣心のことをそう思っている

幸運の呪文 ドリームキャッチャーw

本誌 三回だと思っていたのに四回だったから  
とっさにでてきたww

すみませんでした・・・

## 狂ったのは何時からか（前書き）

久しぶりに本編書くので前のと結構違うかも・・・w

そこらへんはティツシュにでもくると包んでゴミ箱に捨ててく  
ださい

あ、あと神楽が剣心の呼び名を変えています

そこらへんもティツシュにでm「以下略

狂ったのは何時からか

荒んだ暗い色の瞳

それがいつもの彼でないことを示していた

1つ違うだけなのにその目は銀時の過去の記憶を鮮やかに思い出させた

- 奴が蘇ったのだ -

「どうして戻ったんだ？」

声を絞り出すように言った

溜息を1つついてもう一人の剣心は答えた

「さっきの衝撃で完全に人格が2つに裂けてしまったらしい

詳しいことは分からない まあ、俺が体を支配できるようになったのは確かだな」

「遅いな・・・銀さん様子見てくるだけで良いのに・・・」

「銀ちゃんが剣ちゃんに「バキューン」してるんじゃないアルカ？」

「いや、神楽ちゃん何サラリと未成年の成長を妨げるようなこと言ってるの」

いくら銀さんでもそれはないでしょ」

「甘いアル新八、心というものは変わりやすいネ　ずっと普通の仲だった奴と何かの拍子でプツンと切れて後はエスカレーター式アルヨ　2人はその最中ネ」

「だからそれは無いでしょ　何でそういう方向に行くの」

「そんなに心配なら見に行けば良いアル　面白いものが見られるかもしれないから」

「面白いものって何！？　・・・分かったよちょっと様子見に行こうか」

トントン

「銀さーん、何かあったんですか？」

「もしかして今、本番アルカ？」

「だから何なの神楽ちゃん本番って」

「まずいぞ　あいつらが来ちまった」

「お前が質問攻めするからだ」

「とりあえず、どうやって説明すんだよ」

「適当に誤魔化しておいてくれ」

「はあ？　何で俺が」

「こうなったのには貴様にも責任があるだろ」

「ハイハイ分かりましたよお嬢様」

「今、何か言ったか」

「何も？」

「失礼します」

ガラッ

「もう終わっていたアルカ」

神楽は小さく舌打ちした

「何が？」

「いや、気にしないで下さい　あれ、緋村さん何か目が違いますか？」

「これは薬のせいらしいぜ　あいつが帰る時そう言ってた」

あくまでも落ち着いた声で銀時は答えた

「へえー姉上が・・・そうですか」

まじまじと新八は剣心を見た  
本人は無表情だ

「とりあえず、緋村さんは治るまで安静に……」

「その話聞いたわよ」

何者かが天井を突き破って現れた

それは……

「猿飛さん、もうちょっと違う方法で登場して下さい　めちやくち  
やじゃないですか」

「私は銀さんに会うためなら手段は選ばないわ」

彼女は真面目に言っているらしい

「どんな猫が転がり込んできたかと思えば中々の猫じゃない　悪い  
けど銀さんは渡さないわよ」

「……は？」

剣心は呆然としている

「あのな、こいつ男だぞ？」

「あら、そうだったの？　ごめんなさいね　うちの夫がお世話になっ  
てます」

あやめはぺこりと頭を下げた

「ほう、あいつには家内がいたのか　てっきり独り身かと……」

「お前何信じてんだよ　俺はまだ結婚してねえぞ」

「まだ籍を入れてないだけでしょ？　いつ入れるつもり？」

ペラペラと婚姻届を見せた

「一生、入れねえよ！」

だから、緋村さんは安静にしくちやいけないのに……と新八  
は溜息をついた

ふと見ると、あやめの奥に誰か立っているのが目に入った

「猿飛さん、そちらは？」

「あら、紹介してなかったわね ほら、挨拶しなさい」

そう言われて出てきたのは新八と同じくらいの背の人

黒いマントを被っていてよく分からない

「マントを外して」

あやめの言った通りに彼・・・いや、彼女か？・・・は、マントを外した

黒い瞳 黒く短い髪 黒い男用の着物

見た目でいうと新八・神楽と同じ年くらいの少女だった

「この人があや姉ちゃんの相手？」

銀時をまっすぐ指差して少女は言った

「そうよ、よく覚えなさい」

「何でそんな子供に変なこと教えてんだ 教育法間違ってるぞ」

「事実を教えただけよ」

2人の言い合いを聞きながら少女はぐるぐると部屋を回っていたが、ある場所でピタリと止まった

「俺はこの人が良い！」

彼女の指は剣心の方を指していた

「・・・は？」

これには全員が驚く

「もう、この人俺の嫁決定ー」

「だから、こいつは男だぞ？」

「うん、知ってるよ？ でも嫁なの」

銀時の言葉にあっさりと返した

剣心は「何で嫁なんだよ」と言いたそうな目をしていた

「ねえ、あや姉ちゃん ここに住んで良い？」

またしても爆弾発言。

「良いんじゃないの？ 私は構わないわよ」

「おいおい、また食客増やす気かよ？ こっちも大変なんだぜ？」

「お前、全然家事してないくせに・・・」

「別に良いんじゃないですか？ 緋村さんが良ければ」

「何であいつが決定権持つてんだよ」

「緋村さんが家事をこなしてくれるからです」

「俺は良いが……」

「じゃあ、決まりネ」

「もしもーし？ 何で俺抜きで進めてるのかなあ？」

「でも、とりあえず名前を聞いておかなくては……」

「道月祐沙だよ 歳はねえ……忘れた！」

「歳って忘れるものだっけ」

「えーと、これからはどう皆を呼ぼうかなあ……」

「無視ですか」

「銀髪頭が銀で、メガネの人が新兄ちゃん、チャイナみたいな人が神っちで、俺の嫁が……抜ちゃんで！」

この一言に剣心と銀時は反応した

万屋のメンバーはあやめから教わったのかもしれないが最近一緒に生活し始めた剣心の名前を知っていることはおかしい

しかもその名前は……

「抜ちゃんも銀も黙ってどうしたの？」

ひょこりと祐沙が顔を覗かせていた

「……いや何でもねえ」

祐沙は何かを考えている様子だったがすぐに顔をパツと上げてこ  
う言った

「大丈夫だよ 俺は今2人の命を狙っている辻斬りとは違うから」

ニヤリと嗤ったその顔はさっきの祐沙と全く違った人物だった

「おい！ それはどういう意味だ！？」

この祐沙と名乗る少女は何か辻斬りについて知っている者なのか

「次の犯行が行われるのは明後日の月蝕が始まる頃　その時になれば分かるよキヒヒヒ・・・」

・一体その言葉は何を意味するのか・

シンダラオモシ

ロクナイヨ？

## 狂ったのは何時からか（後書き）

無計画だったから大分時間がかかった・・・

あ、この話の間はずっと剣心の目は荒んだままです

祐沙はオリキヤラ

早くも本性見え隠れしてますが・・・「笑」

そして、今回はムダに会話多いですね すみません  
バキューンのところはご想像で

次の話にも時間がかかると思います

ゆっくり待って下さいw

目の前にパトラッシュが見えるときってあるよね え？無い？（前書き）

中間テスト見事に散りました

70点台が1つだと・・・？

くそ、理科やだ

祐沙の呼び方が変わってます キャラは生きているんで

お登勢さんが生きてます

目の前にパトラッシュが見えるときつてあるよね え？無い？

祐沙が「押しかけて」来てから早くも3日目

大分祐沙も落ち着いて・・・

「あああ！ てめえ俺のやる気の源 プリンを食べてんじゃねええええ！」

「いいじゃんまだあるしー それに銀やる気なんてないくせに」

・・・・・・・・・・きてなかった

祐沙のあの変貌も幻だったのではないかと銀時は思えてきた  
剣心の方も、もとに戻った

「2人とも落ち着くでござる 菓子なら拙者が作るから」

「仕方ねえな・・・それで我慢してやるよ」

「剣ちゃんそれなら私にも作るヨロシ」

「えー それなら俺も剣心が作ったのがいいー」

「てめえは買つてあるやつたべるんだろ」

「嫁の作ったものなら何でも食べたくなるのが夫でしょー？」

「お主の嫁になった覚えは無いが・・・」

「あーもう、皆静かにすることはできないんですか」

一瞬の沈黙。

「・・・あ、そっか 新兄ちゃんか」

「忘れてたんだね」

「いやー、あまりにも空気だったからさ」

「何気に酷いよね それ」

何となく全員笑う あははは・  
て、ちょっとストップ

「話逸らさないで下さい」

「別にわざとじゃないネ」

新八は1つ咳払いした

「苦情がきてるんですよお登勢さんたちから」

「んなの日常茶飯事だろ」

鼻くそほじりながら適当に流しているよ この人一応銀魂の主人  
公だね？

「それなら大丈夫だって 今日は苦情こないもん」

「何故言い切れるでござる」

待ってましたと言わんばかりに神楽が答える

「出掛けるからアル」

「何処にだよ」

「むっさい男の溜りb・・・じゃなくて真選組のどこだよ」

「半分本音が聞こえましたけど」

空耳だよ 空耳

「行きたくねーよ 面倒だ」

小さく舌打ちをした

そういえば厄介事には関わりたくないって奴だったね この人

「ふえー 行かないの？」

ぶーぶーと膨れっ面で文句を言っている　本当に歳いくつだよ・  
・と心の中で銀時は呟いていた

「剣ちゃん、馬の耳に念仏でこーゆーことアルか？」

「・・・多分そうでござるな」

常識人間「剣心　新八」の頭の中

- ・こんな展開誰もついていけないだろう
- ・何？　ちゃんと話進んでる？
- ・いきなり爆弾発言されても・・・
- ・行ったら絶対向こうに迷惑がかかる

「そもそも、どうしていきなり行かなくちゃいけないのですか？」

こっぴつところは流石だ新八　控えめな発言である

むー　とうな垂れながら祐沙は答える

「そろそろ事件のこと色々分かつているんじゃないかなあと思って  
自分で調べることもできるんだけど時間かかるし　聞くほうが楽  
でしょ」

そのことかと思ひ出す

「でも相手は警察だからそう簡単には喋らないのではござらんか」

「そこらへんは大丈夫　考えてある」

何を。

「でももう何日も何も無いんだぜ？　辻斬りも気が済んだんじゃない  
か」

「まあ、その可能性も否定できないけど・・・」と聞き入れた

そして、こつそりと銀時にこつ耳打ちした  
「いいの？ このままじゃ俺の言ったこと分らないまだよ」

走馬灯のように蘇るあの時の祐沙  
不気味な響く声 普段の祐沙からかけ離れたあの恐ろしい目  
思い出すだけで寒気がする

あの時の言葉に関係があるのか？  
自分でも思いがけない衝動に銀時は駆られた

「よし 行つてやろうじゃねえか」  
何か吹っ切れたのか

「流石、銀チャンは男ネ！」  
「神楽ちゃん、微妙に言葉の使い方間違つてない？」  
しかし、神楽スルー 細かいことは気にしちゃいけないんだろ  
う 多分きつと

「お主がそこまで言うのなら何かあるようでごさるな」  
仕方ないと剣心は溜息をついた

「僕も行きますよ 何か気になりますし」

「皆行つてくれるの？ ありがとー」  
さつきとは一変 ぴょんぴょんと跳ね回っている

5人は真選組の所へと足を進めた

目の前にパトラッシュが見えるときってあるよね え？無い？（後書き）

只今、小説のリハビリ中なんで色々で見逃して下さい

6月期末かよ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3221j/>

---

るろ剣×銀魂～抜刀斎と白夜叉～

2010年11月22日21時18分発行